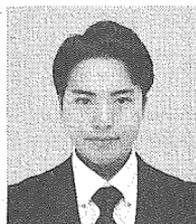


不動産学の魅力

明海大学 不動産学部

第67回



志郎 大志郎
本不 不動産学部
3年

私は音楽活動を通じて、「人が集まる場所」には特有のエネルギーが宿ることを肌で感じてきた。

高校・大学とバンド活動に打ち込み、路上ライブにも挑戦してきた中で、ある商店街での演奏経験が特に印象に残っている。最初は人通りもまばらだったその空間に音楽が鳴り始める

と、少しずつ足を止める人が現れ、やがて小さな輪が生まれ、最後には拍手と笑顔が自然とおふれる「場」に変わっていった。

そのとき私は、音楽はただ音を届けるものではなく、空間そのものという意味と価値を生み出し、「場」へと変える力があると強く実感した。この経験から、「場」を変ええる力とは

何なのか、学問としてどう捉えられるのかに興味を抱くようになった。音楽が「場」を生む例として、私は2つの音に注目した。1つ目が、

不動産学との意外な接点

音楽の「場」をつくる力

商業施設や駅前で流れるBGMである。単なる演出に見えるが、空間に安心感や高揚感を与え、滞在時間や購買意欲に影響を与える。

2つ目が、夕暮れ時に流れるチャイムである。何気なく聞き流しているが、一日の終わりを感じさせ、地域の生活リズムを支える役目を果たしている。また、エリアによって流

れる曲が変わり、地域に対する印象や親しみにも繋がる。

2つの事例から、人々の記憶に残る体験が生まれること、その場所に対する愛着が育まれることが、場を変ええる力だとわかる。しかし、音は騒音としてマイナスを受け取られてしまふこともある。その影響が顕著に現れるのが、「不動産」であると

考えた。

不動産において「騒

る。まさに音楽は、不動産価値を構成する目に見えない資産”の一つであると考ええる。

私にとって音楽とは、人と人をつなげ、場所に意味を与える力そのものだ。そして、その力を科学的・社会的に解き明かすことができるのが不動産学だと考える。音楽と不動産という一見遠い二つの領域だが、どちらも「人が心を動かされる空間」をつくるという点で繋がっていると考える。そんな視点から学べることは不動産学の大きな魅力である。

【教員コメント】

色や形に比べ、音は意識されすぎると騒音になり、当たり前の音は聞き流され、プラスの効果の評価されにくい。路上ライブ、夕暮れ時のチャイムは、聞き流される音と騒音の中間にある。不動産における音の効用を捉える入口なのかもしれない。